

「ユニバーサルデザイン絵本ワークショップ」の可能性と今後の展望

Promotion activity of "universal design picture book" and future's development

小浜 朋子

デザイン学部 デザイン学科

Tomoko OBAMA

Department of Design, Faculty of Design

林 左和子

文化政策学部 文化政策学科

Sawako HAYASHI

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

「ユニバーサルデザイン（以下UD）絵本」は、文化政策学部とデザイン学部それぞれの専門性を活かすことができ、本学ならではのUD研究の素材としては恰好のものである。これまでの活動に新しい試みを重ねてきたこの1年の「UD絵本ワークショップ」の取り組み内容と、その結果見えてきた効果と今後の展望を報告する。

"Universal design (in the following, UD) picture book" is suitable as the material of the UD study the science. It's possible to utilize specialty of each of cultural political science department and design department. As a result, the seen effect and future's view will be reported with the match contents in a UD picture book workshop for this 1 year when more new tries have been piled on the former activity here.

1. はじめに

「UD絵本」とは「身体的、知的特性や年齢、文化などを超えて一緒に楽しむことのできる絵本」のことである。本学では、創立10周年記念事業の1つとして「UD絵本コンクール2010」を開催して以降、「UD絵本コンクール」を毎年継続して開催しているとともに、地域の小学生を対象に「UD絵本」を作るワークショップを実施するなど、UD教育の一環として「UD絵本」を推進してきている。

「UD絵本ワークショップ」については、2014年前期までの活動を林左和子が既にまとめており^{1,2)}、今後の課題として①参加者にUDを理解してもらうためのUDの説明方法、②UD視点を理解した上での「UD絵本」としてのレベルの向上、③学生の指導による芸術作品としてのレベルの向上、をあげている。

筆者も2014年度からデザインのUD教員としてワークショップに関わる中で、UD教育の一環として「UD絵本」が高い可能性を持っていることを感じるとともに、提起された課題を解決する必要性を感じ、林容子先生、清水麻子氏、学生達と一緒に、これまでの「UD絵本ワークショップ」に様々な試みを加えてきた。ここでは特に①「UD絵本」をつくる目的の明確化、②「UD絵本ワークショップ」の推進方法の整備、③「UD絵本」作品集の作成、について紹介したい。

2. 「UD絵本ワークショップ」への新しい試み

2-1. 「UD絵本」を作る目的の明確化

「UD絵本」の活動を進める中で「UD絵本とは何か？」とよく問われる。本学では「UD絵本」は「身体的、知的特性や年齢、文化などを超えて一緒に楽しむことのできる絵本」と定義しているが、なかなかすぐには理解されにく

い。実のところ、筆者もその理解に時間を要した。「バリアフリー絵本」と「UD絵本」の違いを理屈で考えようとすると難しくなってしまうのだ。「バリアフリー絵本」とは、毎年「世界のバリアフリー絵本展」を行っているJBBY（社団法人日本国際児童図書評議会）によると次のように紹介されている。1つは「障がいのある子供たちのために（for）つくられている絵本」もう1つは「障がいのある子供たちについて（about）描かれた絵本」である^{3,4)}。前者は「市販の絵本では何らかのバリアがあるために楽しめない人に向けて、そのバリアを取り除くために特別の手段を施した絵本」で、触る絵本（点字絵本、布の絵本など）、手話がついた絵本、絵文字（ブリス）がついた絵本、音声で読み上げる絵本、わかりやすく描かれた絵本などである。マルチメディアDAISY図書（パソコンで音声とその部分のテキストや画像などが出力されるもの）も含まれる。後者は障害について理解するための本で、「障害」のある人たちによって制作されたものも多い。

UD教育の中で、「身体的、知的特性や年齢、文化などを超えたUDな社会」では、「多様性を受け入れること、思いやりをもつこと、自分自身にとっても心地よいことが大切」としている。そこで、ワークショップでは「UD絵本とは何か」という定義はともかく、「誰のために」「どのようなUD視点を取り入れるのか」を考えながら絵本作りを楽しむことを目的とした。

2-2. 「UD絵本ワークショップ」の推進方法の整備

「UD絵本ワークショップ」は、基本的に子供を対象に行っている。子供の年齢は特に限定していないが、小学1～4年生が中心となることが多い。小学4年生以下の子供には保護者の方同伴でお願いしているため、お母さんだけでなくお父さんはじめ家族での参加も結構多く、4歳～高齢の方まで、一緒に楽しんでいただくケースも増えてい

る。開催の規模にもよるが20名前後が基本となっている。ワークショップの時間は約3時間、土・日・祝日の午後に行われることが多い。

このよう背景から、子供の集中力がとぎれないように配慮しつつ、楽しみながら絵本が作れるように、A)～E)のプログラムを整えた。

A) UD絵本の紹介 (10分)

まず、「UD絵本」とはどのようなものか、「UDの視点」や「UDの配慮」をできるだけ具体的に説明をする。代表的な絵本を見せて解説したり、これまで作ったサンプルに触れながら理解を深め、これから作る絵本のイメージをふくらませてもらう(図1, 2)。



図1. 「UD絵本」の説明



図2. 「UD絵本」のサンプル紹介

B) UD絵本作りの材料の紹介 (5分)

次に、「UD絵本」に使う素材の説明を行う(図3)。



図3. 「UD絵本」の素材

素材には、様々な色や手触りの紙、モール、毛糸、綿、綿棒、輪ゴムなど日常生活にあるものや、100円ショップなどで見つけてきた五感に響く様々なものを用意する。キャップの中にボタンを入れるなど音をつくれる素材や、様々な音色のする鈴なども用意し、視覚、聴覚、触覚の組み合わせによる表現の多様性についても興味を持たせるようにする。テーブル一杯に並べられた素材を見ると子供たちの目は輝きは増し、制作に向けてテンションも高まる。

C) UD絵本の制作 (約120分)

材料の紹介が終わるとすぐに制作に入る。何を作るか決めてきている人もいれば、材料から作りたいもののインスピレーションを得て作り出す人もいる。手が止まっている人には、何を作りたいのか、どんな表現で迷っているのかを聞きだし、一緒にアイデアを練っていく。図4の左の写真のように、学生が1人の子どもに寄り添って作り上げていくことで、子供にとってはどんどん思い通りのものに近づいていく。図4の右の写真はウナギの図鑑をもってきてウナギの形を確かめている様子である。このように、図書館で実施する場合は、図鑑や本から学びながら制作をする体験も合わせてできるメリットもある。



図4. 「UD絵本」の制作風景

D) 作品の発表 (30分)

作品の制作は120分を目途に切り上げてもらい、参加者それぞれに、自分で作った作品の発表を行う。中には、恥ずかしがってぐずる子供もいるが、多くの参加者は学生やご家族のサポートを得ながら堂々と発表している。

図5の4歳の女の子は、お父さんとお母さんに指示をして自分の作りたいものをどんどん仕上げている、発表までしっかりやり遂げ、初めて公の場で拍手をもらって喜んでいた(とお母さんが伝えてくださった)。



図5. 小学生未満の子供の参加

お友達の発表を聞く姿勢は素晴らしく、全ての作品に対して真剣なまなざしで発表を聞いている(図6)。自分の制作・発表に対して自信を持ったり反省をしたり、他の作品からUDの表現方法をいろいろ学ぶなど貴重な時間となる。



図6. 「UD絵本」の作品発表風景

E) アンケート (5分)

最後に、ワークショップへの参加動機、「UD」や「UD絵本」への印象などの他、制作した絵本の概要について記述をしてもらう。具体的には、①タイトル(テーマ)、②どんなことを考えてつくったか(一緒に楽しみたい人など)、③上手く工夫できて気に入っている所、④上手くできなかったけどがんばった所、⑤絵本づくりを通して感じたこと、を書いてもらう。この記述は、自分で書くことによって意識を顕在化するプロセスとしても大切である。

2-3. 「UD絵本」作品集の作成

宇宙の旅 担当(小浜) 東図書館 150628	
<作者からのコメント> ・宇宙のことを考えてつくりました。 ・土星がうまくできました。 ・星はうまくできなかったけどがんばりました。	
●6歳(男) お母さんと一緒 ●参加の理由: ... ●感想: 楽しかった。 ●UDやUD絵本の印象: ...	■ 所感 / 反省点 ・光る折り紙がびったりの題材だったので教えてあげたら喜んで使っていた。 ・黒い字もそれを見て取りに行き、素材はなくなったが、この作品ほど効果的に使っている例は見られなかった。 ・星の型押しカッターを自分で見つけてきて使っていた。
■ 評価ポイント ・ダイナミックな描き方と色・素材がマッチしていても気持ち良い。 ・素材を上手に使っているのを、何を表現したいのかがよくわかる。	
運動会 担当(小浜) 積志図書館 150525	
<作者からのコメント> ・大人になって自分が参加する地区運動会では、毎年玉入れを楽しんでいるのを参考にしました。 ・玉入れのかごや、ボールが取り外せて、かごの中の球の中から出せることができることを工夫しました。 ・マジックテープが少し強くてはがしにくかった。	
●50歳(女) ●参加の理由: UDのことを知りました。絵本が作りたかった ●感想: 家でも作ってみたいと思いました。 ●UDやUD絵本の印象: いろいろな材料で自由に作成できるのが新鮮でした。	■ 所感 / 反省点 ・小さいものを止めるのにマジックテープは強すぎたが代替えのものを思いつかなかった。 ・大人の参加者に向けた高度なアドバイスの内容をもう少し準備しておいた方がいいと思った。
■ 評価ポイント ・緑の台紙が生きている ・鈴が鳴るように、モールの花は鈴に引っ掛けてある。 ・鈴は細いワイヤーで止めて鳴らせるようにしてある。	

図7. 「UD絵本」作品集の事例

ワークショップの終了後、写真や発表時のコメントやアンケートの内容を基に振り返り、作品へのUD評価ポイントや、制作サポートに際しての反省点・所感が書き添えられるシートを作成することにした(図7)。このシートの蓄積は、単なる作品の記録としてだけでなく、スタッフ間のナレッジの共有や「UD絵本」の制作・UD教育へのフィードバックなどに活用できるツールになると考えている。

3. UD絵本ワークショップの反響の変化

3-1. UD絵本ワークショップ参加者の増加と満足度向上

2014年10月以降2015年9月までに、「UD絵本ワークショップ」は合計13回行われている。2014年10月: 浜松市立引佐図書館と掛川市立中央図書館、12月: 浜松市立流通元町図書館、2015年2月: 浜松市役所、4月: 静岡県立図書館、5月: 浜松市立積志図書館、6月: 浜松市立東図書館、7月: 浜松市立南陽図書館と浜松市役所と御前崎市立図書館、8月: 浜松市立流通元町図書館、9月: 浜松市立南図書館と浜松市立佐久間図書館で、全参加者数は約200名となる。中には子供の付き添いで来られたご家族の方がご自身の作品づくりに熱中されるケースもあり、参加スタイルのバリエーションも広がっている。

参加者の満足度も高まりは、アンケート結果の数値データとしても現れているが、具体的なコメントも多くいただいている。例えば、「子供にとって、大学生のお兄さんやお姉さんが手伝ってくれることにより、自分1人で作るのに比べると2倍も3倍もよい出来栄のものができるようになったことがうれしかったようだ。」というコメントをいただいている。達成感とともに「UDは楽しいもの」という印象に残ったことは、「相手のことを思いやり、特別な人だけではなく自分自身にとっても心地よいこと」にもつながり、UD教育の中でも大変重要なことである。

また、「夏のワークショップでは思いがけない工作の面からユニバーサルを学ばせていただきました。とてもいい機会となり、親子で日々ユニバーサルデザインをみつけるようになりました。世界中のみんなが過ごしやすいよう、工夫する心がけ、これからも大事にしていきたいと思います。」といったお手紙もいただいている。

このように「UD絵本」を通して参加者の方々に「UDは特別ではなく、全ての人の日常にとって大事なことだ」という考え方を浸透させていけるという手ごたえを感じられたことは、1つの成果だといえる。

3-2. 制作されるUD絵本の質の向上

「UD絵本」としての作品のレベル向上は課題の1つであったが、この1年の間で作品の質は高まってきており、スタッフはもとより、図書館や市役所の関係者の方もワークショップの後に感動を共有することも多い。

例えば、図8の左上の作品は「四季」を表現した絵本の冬のシーンであるが、グレーを基調にして、小さな鈴を上から落としている。この簡素な空間の表現から、静かな雪のふる日の音が聞こえてきそうである。

図8の左下の作品は小学1年生の男の子がお母さんと一緒に作ったものであるが、子供がカラーの輪ゴムでかっけた見た彩雲を表現したことで、お母さんはその光景を思い出

したそうだ。富士山の雪に和紙を使うなど素材選びの感性が光っている。

図8の右の作品は「動物の運動会」と題した4枚で構成された絵本である。小学1年生の男の子がお母さんと一緒に作った作品であるが、ストローを使ってスムーズに動く方法を考えたり、ケーキのカップを使ってかたつむりを作ったりとその表現力にはびっくりさせられた。

このように感動を呼ぶ作品が増えてきているのは、様々な試みにより参加者の意識が向上したことに加え、サポートする学生の頑張りによるところも大きく感謝したいところである。



図8. 優れた作品の事例

3-3. 本学の学生のUD教育への波及

本学の学生にも「UD絵本ワークショップ」の効果は波及している。

毎年2年生を対象にユニバーサルデザインの授業を行っており、その中で「UDの表現」の1つとして「UD絵本」を紹介した。この授業では最後にUDに関する作品を提出する自由課題があるが、今年の学生は120名の受講生中20名を超える学生が「UD絵本」を制作した。しかも、いずれの作品も色弱者への配慮や心のUDなどUDの理解が深く、デザインの完成度と独創性に優れたものが多かった(図9)。



図9. SUACの学生の作品

4. 今後の活動方向

これまで述べてきたように、文化政策学部とデザイン学部がお互いの専門性を活かしながら、「UD絵本ワークショップ」に様々な試みを行ってきたこの1年の成果として、参加した人の満足度の向上、学生も含めたUDの教育効果の向上が得られたといえる。

また、「UD絵本」の取り組みをデザイン関係や教育関係の方々には話すと、国内外問わず非常に興味を持ち、称賛されることが多い。しかしながら、「UD絵本」の認知度はまだ高いとは言えず、2015年度の「UD絵本コンクール」の応募数はそれほど伸びなかった。また、授業での効果は述べたものの、大学内で展示会を行っているにもかかわらず学生全体の意識もそれほど高いとはいえないのが現状である。

そこで今後は、この1年である程度「UD絵本ワークショップ」としてのパッケージ化ができてきたのであるから、これまでのような草の根的な地道な活動を続けるだけでなく、「UD絵本」の世界を広げるような動きをした方が効果的ではないかと考える。

その1つとして、南相馬での「UD絵本ワークショップ」の実施を考える。東日本大震災の後のワークショップの盛り上がり有一段落した今、だれもが親しめる絵本を通して、心のUDも含めた「UD絵本」の可能性を活かしたい。

また、もう1つには海外での実施である。既に韓国、タイでは、興味を持ってくれそうな相手先を探し始めている。「素材」から五感を使って何かを感じ取り表現するというクリエイティビティは万国共通であり、しかも、その視点をお互いに刺激しあうことは「UDのわくわく感」にもつながり、「相手のことを思いやり、特別な人だけではなく自分自身にとっても心地よいこと」にもつながっていく。

「素材から発想する」、「絵本を作る」、「ストーリーを生み出す」、「絵本を贈る相手のことを考える」プロセスは、UDとは何かを考え、UDは身近なものであり、大事なものであり、楽しいものであるという意識を子供から大人まで広げられる可能性を持っていると考える。今後もさらに文化政策学部とデザイン学部、教員と学生が一体となってSUAC発、浜松発の「UD絵本」の活動を高めていきたい。

参考文献

- 1) 林左和子. 静岡文化芸術大学研究紀要. Vol.15, 2014, 123-125p
- 2) 林左和子. 静岡文化芸術大学研究紀要. Vol.12, 2011, 59-65p
- 3) 障害保健福祉研究情報システム. 展示 世界のバリアフリー絵本展 (平成19年度93回全国図書館大会) http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/library/071030_jia93-12/tenji.html, (参照 2015-10-10).
- 4) バリアフリー絵本研究会 攬上久子. ようこそバリアフリー絵本の世界へ. <http://www.bf-ehon.net/goaisatsu>, (参照 2015-10-10).